

Ⅱ. 学習計画の考え方（2024～2013 年度生）

学習計画は将来（卒業後）の目標を念頭において立ててください。目標を具体的に設定することは簡単なことではありませんが、早い段階で決めることによって、大学を将来の目標に向かっての準備の場として有意義に学ぶことができます。

神学部では主として「キリスト教」「ユダヤ教（ユダヤ学）」「イスラーム教」の3つの宗教に関連する科目を学ぶことができます。また、その他の関心ある学問分野も広く学べるカリキュラムになっています。幅広い宗教的教養を身につけると同時に、外国語科目、保健体育科目を含む全学共通教養教育科目や他学部科目を履修し、他の分野の知識も積極的に身につけてください。主専攻である神学を土台としながら、その他の分野においても系統だった科目履修をすることによって、副専攻となるような「自分のテーマ」を設定することができます。

一般就職する場合、希望する職種と関連する分野の科目を履修すればよいでしょう。キリスト教関係の職種をめざす場合でも、他の分野の科目を履修することは、自分自身の幅を広げる貴重な機会となります。具体的には、英語やドイツ語などの外国語、法学、国際政治学、社会福祉学、社会学、経済学、商学、スポーツ科学などの分野、あるいは「アメリカ」や「ヨーロッパ」や「アジア」などといった一つの分野や学部・学科を越えたテーマを「自分のテーマ」として選択してはどうでしょうか。こうした科目は原則として卒業に必要な単位として認められます。

幅広く学ぶことと共に大事なものは、自分の思考の軸足となる学問的基礎を築き上げていくことです。キリスト教、ユダヤ教、イスラーム教のどれ一つをとっても、膨大な学問的蓄積を持っています。したがって、それらの基礎をバランスよく学びながらも、より重点的に学びを深めていく領域を設定することが求められます。以下においては、キリスト教、ユダヤ教、イスラーム教のいずれかを自分の学問的基礎と定めた場合に、それぞれにおいて求められる学習計画を提示します。

卒業論文について

神学部では「卒業論文」を必修科目としていません。しかし、自分で関心のあるテーマを設定し、文献収集から構想、そして執筆といった段階をやりぬくことは、貴重な体験となります。神学部での勉強・研究をまとめる良い機会です。ただし、4年次に「卒業論文」を科目登録していないと提出できませんので、注意してください。

卒業論文のテーマはキリスト教、ユダヤ教、イスラーム教そのほか広く宗教に関するものを選ぶことができます。学際的にいくつかの領域にまたがるものであってもかまいません。

ただし、卒業論文は自己流に書けばよいというのではなく、学問的な方法に従って研究を行い、まとめるものですから、指導教員との密接なやりとりが必須です。指導は原則として演習科目（ゼミ）を通じて行われますので、指導を希望する教員の演習を春学期、秋学期とも履修してください。演習を担当していない教員から指導を受けた場合は、事前にその教員と相談してください。誰に指導してもらったらいいかわからない時は、身近な教員に相談すれば情報が得られるはずです。

キリスト教神学の学習計画

はじめに

学習計画は、卒業後に目指す進路によっておのずと変わってきます。しかし、どの進路に進むにせよ、早い時期に、聖書学・キリスト教史・組織神学・実践神学・キリスト教文化学・宗教学の各分野の基本的な科目を幅広く履修することが大切です。1・2年次では各分野の「基本科目」を履修することをお勧めします。

また、科目には講義と演習（ゼミ）がありますが、どちらの形式の科目にもバランスよく、積極的に参加することが望まれます。特に3年次以降は、卒業論文の作成を視野に入れて演習科目を履修し、担当者からの指導を継続的に受けることが望まれます（各教員の「卒業論文」シラバスに記載されている演習を参照してください）。卒業論文は大学での学びを総括するよい機会となりますので、ぜひチャレンジしてください。ただし、4年次に科目登録をしていないと提出することはできません。

実際に学習計画を立てるときは、将来（卒業後）の目標を念頭においてください。目標を具体的に設定することは簡単なことではありませんが、早い段階で決めることによって、大学を将来の目標に向かっての準備の場として有意義に学ぶことができます。将来の目標と関連させた学習計画として、次のような考え方があります。

1. 一般就職をめざす学習計画

—— キリスト教を中心として広く教養の修得をめざし、卒業後一般就職を目標とする

神学は現実の社会とは直接関わりのない学問分野と思われるがちですが、そうではありません。宗教的側面を理解することによって、世界や社会をより正確に捉えることができます。宗教についての知識をしっかりともち、世界や社会の動きのなかでの宗教の役割を明確に語れる人物が現在求められています。そのために、神学部が開講している科目をバランスよく履修し、キリスト教だけではなく、ユダヤ教、イスラーム教などの宗教の全体像をしっかりと学んでください。また、外国語の科目も数多く開講されています。積極的に履修し、語学力を確実に高めてください。

1・2年次では、基本科目や外国語を中心に履修し、幅広い分野で基礎的な知識を身につけてください。希望する職種を早く決めていれば、その職種と関連する科目も早い時期から受講することが可能となり、就職の準備ともなります。演習形式の授業にも参加してください。問題の見つけ方、分析の仕方、考え方、発表のスキルを身につけることができますし、教員や参加学生との交流を深める機会も得られます。

一般就職をめざす学生のために、神学部では一般就職に備える科目を提供しています。3年次には「キャリア・ガイダンス・セミナーⅠ、Ⅱ」を必ず履修してください。先輩に就職活動の体験を語ってもらったり、就職に関する情報の提供などを行っています。また、本学のキャリアセンターをとおして就職の支援を受けることができます。キャリア支援システム「e-career」で進路希望登録をしてください。

2. 教会教職をめざす学習計画

—— 牧師、伝道師を志望する

教会教職の資格は各教派によって異なります。日本基督教団の場合、補教師試験を受ける基礎資格は、教団に所属する教会で信徒として3年以上在籍し、信仰生活を送っていることです。教会教職をめざす先輩の多くは大学院（前期課程）に進んでいます。補教師試験受験のためには、神学部と神学研究科で必要科目を履修しなければなりません。必要科目を履修していない場合には、いくつかの検定科目を受験する必要があります。詳細は入学後のオリエンテーション期間に開催する「補教師試験受験ガイダンス」で確認してください。

教会教職をめざす場合、神学の各分野の科目をバランスよく履修し、神学について幅広い知識を身につけておく必要があります。聖書の言語である聖書ヘブライ語や新約ギリシア語を習得することも大切です。また、ユダヤ教、イスラーム教の科目を履修しておくことも将来役立つことになるでしょう。

3. 学校教職をめざす学習計画

—— キリスト教主義中学・高等学校の宗教科教員を志望する

教員になるためには教育職員免許状を取得する必要があります。神学部では宗教科の免許状を取得できません。宗教科の教師は教諭であるとともに、学校で牧師としての役割を担う人物であることを十分に認識してください。宗教科の教員となるためには、教会教職をめざす場合と同じく、高度の神学的素養および教会生活の経験が要求されます。多くの場合、大学院神学研究科博士課程（前期課程）修了が望まれます。

学校教職をめざす場合にも、神学の各分野の科目をバランスよく履修し、神学についての幅広い知識を身につけておく必要があります。キリスト教だけでなく、ユダヤ教やイスラーム教の科目も履修しておくことが大切です。

教職課程の履修については、「VI. 2026 年度 免許・資格関係科目」の「■免許・資格関係科目と自由科目について」（60 ページ）と入学年度に応じた『免許・資格関係履修要項』を参照してください。なお、教職課程のカリキュラムは入学年度によって異なりますので、必ず自分の入学年度の『免許・資格関係履修要項』を参照してください。不明な点などがある場合は免許資格課程センター事務室（今出川キャンパス教務センター内：良心館）または神学部・神学研究科事務室で相談してください。

4. 大学院神学研究科への進学をめざす学習計画

大学院神学研究科博士課程（前期課程）には神学専攻の1専攻が設置されており、その下に聖書神学研究コース、歴史神学研究コース、組織神学研究コース、実践神学研究コース、一神教学際研究コースの5コースがあります。各コースとも研究テーマによって準備しておくべきことが異なりますので、なるべく早い時期に希望するコースの教員に相談してください。

どのコースをめざすにせよ、神学の各分野の科目をバランスよく履修し、神学について幅広い知識を身につけておく必要があります。また、キリスト教だけでなく、ユダヤ教やイスラーム教の科目を履修しておくことも大切です。

大学院入学試験についての詳細は『大学院入学試験要項』に記されていますので確認してください。

前期課程の入学試験は入学前年度の9月頃および年度末の2月頃に実施され、2度の受験機会があります。また、3年次生で受験できる「飛び級」の制度もあります。毎年6～7月頃には大学院入学試験についての説明会が行われます。

なお、試験日程・試験科目・免除規定等は各年度の入試要項を確認してください。今後変更されることもありますので、注意してください。

大学院神学研究科への進学をめざすみなさんは、修了後の進路をしっかりと考え入学試験に臨んでください。

はじめに

ユダヤ学（Jewish Studies）とは、聖書およびユダヤ教とユダヤ人に関するすべてのことを、歴史批判的に学ぶ学問です。このユダヤ学の起こりは、19世紀初頭のドイツの大学に学ぶユダヤ人学生が提唱した「ユダヤ科学」運動——自らの歴史・文化およびユダヤ教古典を歴史的な見地から見直して、偏りの無いユダヤ（自己）理解を目指す運動——に由来します。いわずもがな、ユダヤ教は、キリスト教の母体であり、またイスラーム教も、ユダヤ教およびキリスト教の存在なくしては歴史的に発生しません。ユダヤ教の理解は、キリスト教を理解する上で、またイスラーム教を理解する上で極めて重要です。とはいえ、この近代的なユダヤ学が誕生した後も、ユダヤ教・ユダヤ人を客観的に研究・理解することの重要性は、ユダヤ人に対する偏見が障害となってなかなか理解されるものではありませんでした。しかし、今日では、ユダヤ学はメジャーな学問です。ハーバード大学、スタンフォード大学、オックスフォード大学等の、欧米の著名な大学には、いずれもユダヤ学研究センターが存在しています。

日本の学術界において、ユダヤ学の認知度はまだまだ低いですが、同志社大学神学部・神学研究科では、日本ではじめて本格的なユダヤ学カリキュラムを整備するべく第一歩を踏み出しました。そして、大きく立ち遅れた日本のユダヤ教研究を牽引し、それまでのキリスト教研究・イスラーム研究にユダヤ教研究を加えることで、本格的な一神教学際研究の基盤づくりを目指し、様々な観点からユダヤ教とその歴史、ユダヤ人が生み出した文学、思想、文化を学ぶ包括的なユダヤ学講座の実現を目指しています。

1. ユダヤ学の基礎：現代ヘブライ語

ユダヤ学は、狭い意味では《ユダヤ教》の研究ですが、広い意味では《ユダヤ人の文化・歴史》の研究です。その二つの意味のどちらかにかかわらず、ユダヤ学を専門的に学びたい人には、現代ヘブライ語は、ぜひとも履修してほしい科目です。現代ヘブライ語は、ユダヤ人の歴史の積み重ねを、そのまま語彙や概念において継承しています。聖書及びユダヤ教古典を読解するのに、また現在のイスラエルを中心としたユダヤ人社会や西欧や中東のユダヤ文化を知るのに、必須のテキスト・参考文献がありますが、それらにアクセスするためにも、現代ヘブライ語の知識は不可欠です。そのために、同志社大学神学部は、日本で唯一といっているイスラエル人教員による総合的で体系的な、高いレベルを誇る現代ヘブライ語のカリキュラムを用意しています。もし学部時代に現代ヘブライ語を本格的に身につけるなら、卒業後、研究方面に向かうにしても、就職を目指すにしても、他学部・他大学では得がたい稀有な言語能力として高く評価されることでしょう。また現代ヘブライ語は、聖書ヘブライ語習得の近道でもあります。現代ヘブライ語に習熟することで、聖書ヘブライ語の理解も深まり、ラビ・ユダヤ教文献を読むためのアラム語の学習も容易になり、古代から中世、近現代にまでいたる様々な時代のユダヤ教文献を読解する力となることでしょう。

2. ユダヤ学の基本科目

ユダヤ学では、旧約聖書はヘブライ語で書かれているのでヘブライ語聖書と呼びます。ユダヤ教文化を理解する上では、早い時期に、ヘブライ語聖書の基本的な内容に翻訳を通してでも通曉していることが望まれます。そのため1年次から2年次の間に「旧約聖書学入門1、2」、「新約聖書学入門1、2」の一部または全部を履修することを勧めます。なぜなら、ユダヤ教の思想、文化はヘブライ語聖書とその聖書解釈を基盤としているからです。ユダヤ教が生み出した膨大な文献は聖書の記事や言葉の引用に充ちており、またユダヤ人作家の作品を理解するには、その中に無数に織り込まれている聖書物語の情景やモチーフまた言葉への暗示を的確に捉えるセンスが必要とされます。そこで、まずは邦訳でもいいので、ヘブライ語聖書の最初のペー

ジから最後のページまでをすべて（できれば数度）読み通すことをお勧めします。ユダヤ人の議論を理解する上で、聖書の言葉への鋭敏な感性は必須です。

紀元後 70 年エルサレム第二神殿の崩壊によって、ユダヤ教は、神殿中心の宗教から、ラビたちが牽引する聖書の学びを中心とする宗教へと大きく軌道を転換することになりました。ヘブライ語聖書の解釈から導き出される膨大な口伝伝承を継承し、様々な戒律を日々の生活の中で実践することが神に至る道だと考えられました。中世にはキリスト教、イスラーム教世界の中に寄生しながら周辺社会・文化との相克の中で、しばしば負の歴史に巻き込まれながら、生き抜き、現在に至っています。このユダヤ教の歴史、ユダヤ教が生み出した文献と理念、ユダヤ教の信仰生活の諸相については、基本講義である「ユダヤ学概論 1～3」で学ぶことができます。またユダヤ教、ユダヤ人がたどった歴史を「ユダヤ教とその周辺文化 1・2」で学んでください。これらの講義を出発点として、ユダヤ教の全体像を理解した上で、自分の関心に合わせて学びを深化させることを勧めます。

3. ユダヤ学の発展科目

ユダヤ学の学びをさらに発展させるために、中世ユダヤ思想についてより深く学ぶ講義もありますし、ユダヤ教文献を原典で読み解くためのアラム語についての講義があります。演習では、ユダヤ教の聖書解釈やタルムードを原典から読み解きます。また、現代のユダヤ教がかかえる問題、ユダヤ教の女性像、ユダヤ教の祈りについて、ユダヤ文学について、現代ヘブライ語の文献を読み込み、最先端の議論を学ぶことも可能です。

一方で、ユダヤ学の範囲は、ユダヤ人の関わる空間と時間の現実のすべてに対応しています。ユダヤ人には、長い歴史があり、その地理的な舞台もヨーロッパからアジアまで、また活動分野も宗教や歴史のみならず、文学・思想・芸術・音楽など幅広く、従って、ユダヤ人文化の研究を特定の分野・テーマに限定することはできません。またユダヤ教と他の一神教の相互関係は起源のみならず、その後の歴史においても深く、イスラーム学の中にも、キリスト教神学の中にも、十分にユダヤ学の要素は存在しています。例えば、カントやヘーゲルやウェーバー等の宗教理解や、マルクスやフロイト等の理論も、ユダヤ人問題やユダヤ教批判との関わりを抜きにしては理解できない部分があります。したがって、ユダヤ学は、哲学や社会学、心理学や文芸批評にも関係します。従って、たとえ直接的に、ユダヤ人とユダヤ教の問題を扱っていないように思える科目でも、受講者の意識の持ち方次第では、有益な学びをすることができます。

その点では、神学部カリキュラムが設けている選択科目 6 類の自由度を有効に利用して、他分野の科目や他学部設置科目にも興味を持ってください。これは演習に関しても、同じことが言えると思います。

4. ユダヤ学から何を学ぶか

なぜ、ユダヤ学を学ぶのでしょうか。もちろん、ユダヤ教の理解のため、キリスト教一特に史的イエスの理解のため、イスラーム教の理解のため、等の目的が考えられるでしょう。このような直接的な目的に加えて、ユダヤ教、ユダヤ人の姿を通して、彼らの強靱な思考力というものを学んでほしいと思います。ユダヤ人の生み出した議論は、往々にして形式主義とか重箱の隅をつつくような議論と揶揄されてきました。しかし、こんな発想があるのか、ものの見方ができるのかという驚きも与えてくれます。そして、役に立つ／立たないを度外視して、神からの贈り物であった聖書の言葉から生み出される可能な限りの解釈を伝えてきたユダヤ教は、エルサレム第二神殿崩壊後、およそ 2000 年近く国家という形をとることなく、しばしば迫害の犠牲になりながらも、歴史の中に雲散霧消してしまうことなく、今に生き続けています。その原動力になったのが、形にはならないけれども、だからこそ誰にも壊すことのできない伝承、伝統、言葉の数々、それら

を生み出す強靱な思考力でした。ドイツ出身ユダヤ人女性の思想家ハンナ・アーレント（1906-1975）は理性と科学の時代である現代社会において、なおショア（ホロコースト）という現象が起きたことを目の当たりにして、思考し続けることの大切さを説きます。えてして、形になるもの、役に立つもの、効率的なものだけが求められる昨今、何が人間を支えるのか、ユダヤ教の姿を通してじっくりと考えてみてほしいと思います。

そして、日本のユダヤ学の担い手は、ユダヤ人ではなく、日本に住み日本語を用いる人たちです。日本には、古来より様々な宗教伝統が流入してきましたが、それらは日本人の心の中で和合されてきました。これは日本のユダヤ学が置かれている独自の文化環境であり、継承すべきもう一つの精神伝統でもあります。学問を深く掘り下げる作業は、その学問対象を深く知ることですが、同時に、それは自分自身を深く知ることでもあります。その意味で、ユダヤ学を志す学生には、日本人の宗教感性や日本人の伝統的宗教の歴史についても、また近代日本におけるキリスト教受容の歴史についても、高い見識を養うことを勧めます。そして、日本のユダヤ学の置かれているユニークな状況を強く意識してほしいと思います。

5. 大学院に進む場合

卒業後、ユダヤ学研究を大学院で続けることを志す場合は、学部の4年間のうちに、英語、現代ヘブライ語の力をしっかり身につけてください。また、ユダヤ学の基本科目、発展科目、演習科目を積極的に履修し、自分の研究したいテーマを明らかにしましょう。そして、なるべく早い段階で教員に相談してください。

イスラーム学の学習計画

はじめに

イスラーム教は、ユダヤ教、キリスト教に続く一神教として西暦7世紀前半に成立し、ユダヤ教、キリスト教と様々な関係を有してきました。そのため、イスラーム教について学ぶことは、キリスト教とユダヤ教を学ぶためにも有益です。イスラーム教を学ぶ際にも、キリスト教とユダヤ教について学んでおくことは有用です。20世紀後半以降、ムスリム（イスラーム教徒）が多く暮らす中東・西アジアや東南アジアと日本との関係が密接になってきたことから、イスラーム教に関する学科や講座を置く大学も増えてきました。しかし、キリスト教・ユダヤ教とともにイスラーム教を専門的に学べる学部は日本国内では本学部だけです。その希有な環境を十分に活用してほしいと思います。

さて、その中でイスラーム教を中心的に学ぶ場合には、イスラーム教の教義と思想、および、ムスリムたちが作り上げてきた社会や文化について、幅広く体系的な知識を獲得してください。イスラーム教は比較的新しい一神教ですが、それでも1400年あまりの歴史を持ち、ムスリムたちは、北アフリカ、西アジア、中央アジアだけでなく、サハラ砂漠以南のアフリカや南・東南アジアの様々な地域で暮らしてきました。今日では、欧米や東アジアでも増加しています。したがって、イスラーム教について幅広く体系的に学ぶことは、時代や地域ごとに様々な異なるムスリムの思想・文化・社会・経済・政治を見るとともに、それらの多様性をつなぐ宗教としてのイスラーム教を考えていくことになります。そして、イスラーム教に関する確かな知識に基づいて、自分が見つけた問題に主体的に取り組む姿勢と能力を身につけることを目指してください。

以上の認識と目標に基づいて本学部が提供するイスラーム教関連科目は、「アラビア語科目」と「講義科目・演習科目」に大きく分けられます。以下では、イスラーム教の啓典『クルアーン（コーラン）』の言葉であり、イスラーム教全般を学ぶ上で重要なアラビア語に関する科目を解説し、続いて、イスラーム教とムスリムに関して幅広く深く学んでいくための講義科目・演習科目を紹介します（ペルシア語とトルコ語については、後に述べます）。

1. アラビア語科目

キリスト教において聖書学が重要であるのと同じように、イスラーム教においてクルアーン学は重要で、その基礎はアラビア語です。また、アラビア語は、アラブ諸国の国語として用いられる生きた言語であり、国連公用語の一つでもあります。

学習順序としては、①「アラビア語初級1、2」（2023年度以前生は「アラビア語入門と講読1、2」）、②「アラビア語文法」（2023年度以前生は「アラビア語入門と文法2」）を併せて学習して基礎を学び、「アラビア語中級1、2」（2023年度以前生は「アラビア語講読1、2」）に進んで、文法の知識などを実際にどのように用いるのか訓練を重ねてください。そうした段階を経て、「アラビア語上級」（2024年度生のみ）で会話や作文を含んだ総合的な運用能力を身につけてください。

なお、アラビア語はムスリムだけの言語ではありません。アラビア語を母国語とするキリスト教徒やユダヤ教徒もいますので、アラビア語学習は他の一神教理解を深める上でも役に立ちます。

2. 講義科目・演習科目

「講義科目」は、教員の解説を主体とする科目です。学生は、出席して教員の解説を聞いて理解するとともに、必要に応じた予習と復習が求められます。「演習科目」は、学生の発表や議論を主体とする科目です。本学部では、履修の順序にあまり制限を設けていませんが、「講義科目」で知識を積み重ね、自分の興味関心に応じた「演習科目」に進むのが一般的です。以下では、基礎から体系的にイスラーム教について学ぶための

目安として、「講義科目」を(1)基礎、(2)概説、(3)専論の3段階に分けて解説した後で、(4)「演習科目」について述べます。

- (1) 基礎 イスラーム教の教義と思想、ムスリムの歴史と現状に関する基本的な知識を習得する科目です。「イスラーム概論Ⅰ、Ⅱ」、「イスラーム史概論Ⅰ、Ⅱ」、「現代イスラーム世界Ⅰ、Ⅱ」が、この段階にあたります。高校までの社会科の授業と連続した部分もありますが、大学においてイスラーム教について学び研究するための基礎として、イスラーム教の根本的な教義やムスリムの歴史の概略、現代のムスリムが置かれている状況や直面している問題について、基本的な知識をしっかりと身につけてください。
- (2) 概説 イスラーム教を学ぶためには、様々な切り口があります。『クルアーン』やハディース（預言者ムハンマドの言行に関する伝承）といった、イスラーム教の根本的な宗教テキストについて学ぶことは、もちろん重要です。しかしそれだけでなく、例えば、日本で一般的にイスラーム教と言うと「戒律が厳しい」とのイメージが強いですが、その「戒律」、すなわち、「イスラーム法（シャリーア）」について学ぶことも大いに意義があります。あるいは、華やかな文化を誇るイラン（ペルシア）のイスラーム教の伝統と現状や、イランの多数宗派であり、ニュースにもしばしば登場するシーア派について学ぶことも興味深いです。この段階の講義科目においては、そうしたイスラーム教を学ぶための様々な切り口をトピックごとに、その概略を解説します。
- (3) 専論 この段階の講義科目では、担当教員の研究成果に基づいて、イスラーム教の思想や法学などの宗教諸学、神秘主義（スーフィズム）、および、それらの担い手であるウラマー（宗教知識人）とスーフィー（神秘主義修行者）の歴史と現状など、様々なテーマを取り上げます。それなりに高度で専門的になりますが、先端的なイスラーム研究に触れることができます。「イスラーム思想Ⅰ、Ⅱ」や「初期・古典イスラーム研究Ⅰ」、「中世・近世イスラーム研究Ⅰ」などがこの段階に相当します。
- (4) 演習科目 演習科目は、講義科目で得た知識を応用して主体的に学び、その成果を発表して議論することを訓練する場と言えます。内容については、担当教員の専門に応じて科目ごとに大まかなテーマが設定されており、研究の材料となるアラビア語やペルシア語の史資料を精読するものと、設定したテーマや選定した研究文献について調べて発表・議論するものに大別されます。精読する文献や具体的なテーマは、教員と学生の話し合いによって決定されることが多く、内容の自由度は高くなりますが、それだけに、学生の能動的な参加が重要になります。そうした能動的な学習の総仕上げとして、卒業論文の作成を推奨します。

なお、ペルシア語の学習については、「ペルシア語入門Ⅰ、Ⅱ」「ペルシア語入門Ⅲ、Ⅳ」、トルコ語については「トルコ語初級Ⅰ、Ⅱ」「トルコ語中級Ⅰ、Ⅱ」「トルコ語上級」（2024年度生）が開講されています（2023年度以前生も6類科目として他学部で開講されているトルコ語の科目を履修することができます）。トルコやイラン、中央・南アジアのイスラーム教を学びたい学生は、1年次生、2年次生のうちからこれらの科目を履修することを強く勧めます。

以上のとおり、段階に分けて講義科目と演習科目の概要を説明してきました。しかし、これらの段階を必ず踏む必要はありません。強い関心のある学生であれば、2年次生から履修できる演習科目もあります。自由に学習計画を立てることができるのが本学部の特色でもありますので、イスラーム学関連科目を中心に学習を進める場合でも、シラバスをよく読んで、その内容や配当年次を参考に主体的に学習計画を立ててください。そして、不明な点がある場合には、積極的に教員に相談してください。

3. 進路

本学部環境を活かして、キリスト教・ユダヤ教にも目を配りつつ、イスラーム教を中心に学習を進めていくことで、イスラーム教について幅広く深い知識を身につけ、イスラーム教に係わる諸問題を主体的に研究・考察できるようになっていることでしょう。そして多くの学生が、一般企業や官公庁への就職を選択します。率直に言って、現在の日本において、イスラーム教に関する知識だけで就職することは困難です。しかし、報道、観光、行政、国際援助などの分野で、イスラーム教に関する確かな知識が必要とされています。したがって、イスラーム教に関して専門的に学んだ経験は、大きなアピールの一つにはなるでしょう。

他方、大学院に進学してイスラーム研究者を志す学生は、本学部が提供するイスラーム学関連科目を確実に履修することはもちろん、各自が志向する学問分野に応じて、他学部の講義も積極的に履修してください。宗教学はイスラーム研究の主要分野の一つではありますが、文学、歴史学、社会／文化人類学、法学、政治学、経済学、地域研究など、様々な分野でイスラーム教に関する研究は蓄積されています。したがって、自分が取り組む分野を見定め、その分野のディシプリンを身につけることは必須です。同じ分野で他の宗教・文化・地域を研究している人々と建設的な議論ができることは、研究者としての視野を大きく広げます。

語学の学習にも熱心に取り組んでください。原典史資料の批判的実証的分析は人文社会系諸学問の基礎であり、イスラーム研究においても、アラビア語やペルシア語、トルコ語の原典史資料を分析するための高い能力が求められます。また、研究文献を読みこなし、国際的水準で研究を遂行するための英語力は不可欠です。分野によっては、フランス語、ドイツ語、ロシア語なども必要とされます。ウルドゥー語、マレー語など、本学部が提供していない、あるいは、本学の語学科目に含まれていない言語を学ぶ必要がある場合には、教員に相談してください。